

狸のお祭り

豊島与志雄

青空文庫

むかし、ある片田舎かたいなかの村外むらはずれに、八幡様はちまんさまのお宮が
ありまして、お宮のまわりは小さな森になっていました。

秋の大変月のいい晩でした。その八幡様の前を、鉄砲を持った二人の男が通りかかりました。次郎七じろしちに五郎八ごろうはちという村の獵師りようしでありまして、その日遠くまで獵に行つて、歸りが遅くなつたのでした。どういふものか、その日は一匹も獲物がありませんでしたから、二人はがっかりして、口も利きかずに急ぎ足で、八幡様の前を通り過ぎようと思いました。まるい月が空にかかつていて、昼

間のように明るうございました。すると、先に歩いていた次郎七がふと立ち止まって、八幡様の横にある、大きな^{むく}棕の木を見上げました。五郎八も立ち止まって、同じく棕の木を見上げました。そして二人はしばらく、ぼんやり眺めていました。それももつともです。棕の木の高い枝に、一匹の^{たぬき}狸が上つて、^{はらづつみ}腹鼓を打つてるではありませんか。

秋も末のことですから、^{むく}棕の木の葉はわずかしか残っていませんでした。その淋しそうな^{はだか}裸の枝を、明るい月の光りがくつきりと照らし出していました。そして一本の大きな枝の上に、^{たぬき}狸がちよこなんと後足で座つて、まるいお月様を眺めながら、大きな腹を前足で叩いているのです。

ポンポコ、ポンポコ、ポンポコポン、
ポンポコ、ポンポコ、ポンポコポン。

次郎七と五郎八は、あつけにとられて、暫く狸しばらの腹はら鼓づつみを聞いていました。それから初めて我われに返ると、五郎八は次郎七の肩を叩いて言いました。

「空手からてで戻るのもいまましいから、あの狸でも撃つてやろうか」
「そうだね」と次郎七も答えました。「狸の皮は高いから、可哀かわいそうだが撃ち取ってやろう」

そして二人は鉄砲に弾丸たまをこめ始めました。

ところが、その話が聞えたのでしよう、狸は腹鼓をやめて、じろりと二人の方を見下ろしました。そしておかしな手付を——いや、狸ですから足付あしつきというのでしようが、それをしますと、急に狸の姿が見えなくなつて、後には棕の木の頑がんじょう丈な枝が、月の明るい空に黒く浮き出してるきりでした。

次郎七と五郎八とは、またあつけにとられて、夢でもみたような気がしました。それからいまいましそうに舌打ちしたうをして、弾丸のこもつた鉄砲をかついで、帰りかけました。

はちまんさま

八幡様の森を出て、村の中にはいろうとすると、これはまた意外です、道のまん中にさつきの狸が後足あとあしで立つて、こちらを手招きしながら踊つてるではありませんか。

次郎七と五郎八とは、黙って合図をして、鉄砲でその狸たぬきを狙い、一二三という掛声かけこえと共に、二人一緒に引金を引きました。ズドンと大きな音がして、狸はばたりと倒れました。二人は時を移さず駆けつけてみますと、これはまたどうでしょう、大きな石が弾丸たまに当たって、二つに割れて転がっているのです。

二人はばかばかしいやら口惜くやしいやらで、じだんだふんで怒りました。きっと狸ねこに化かされたに違ちがいないと、そう思いました。そして、是非ぜひとも狸ねこを退治たいじしてやろうと相談しました。

翌日二人は、八幡様はちまんさまの小さな森に出かけて、狸の巢くまを隈なく探し廻りました。しかしどこにもそれらしいのは見当りませんでした。けれども、晩にはまた出て来るかも知れないと思つて、月が出るのを待つて再び行つてみました。

月は前の晩と同じように、綺麗きれいに輝いていました。昼間のよう
に遠くまで見渡せました。二人は八幡様の前へ行つて、例の棕むくの
木を見上げました。すると狸はいませんでした。たくさんむの棕
くどり鳥がその枝にとまっています。

「あいつでも撃つてやれ」と二人は言いました。

そして二人一緒に鉄砲の狙ねらいをつけて、打ち放しました。二羽
の棕鳥がひらひらと落ちてきました。二人はそれを拾い上げまし

た。それからまた見上げると、他の椋鳥むくどりは逃げもしないで、ちやんと元の枝にとまってるではありませんか。

「晩だから眼が見えないのかな」と次郎七が言いました。
「きつと眠っているんだろう」と五郎八が言いました。

それから二人は、椋鳥を片端かたはしから撃ち落としました。二十羽あまりもいた椋鳥を、すっかり撃つてしまいました。それを二人で分けて、喜んで帰ってゆきました。

次郎七は勢いよく家に飛び込んで、狸たぬきはいなかったがこんな物を取ってきた、と言いながら椋鳥たみを畳の上に放り出しました。その顔をお上かみさんはじつと見ていましたが、思わずぷつとふきだしてしまいました。

「何を笑うんだい」と次郎七はたずねました。

「だっておかしいじやありませんか。椋鳥だなんて言つて……」
見ると、椋鳥だと思つたのは、みんな椋の葉だつたのです。

そこへ、五郎八がやつて来ました。ぷんぷん怒っていました。

五郎八の方でも、椋鳥だと思つたのは、家へ帰ると椋の葉だつたのです。

「どこまでも人を馬鹿にしてる」と二人は怒鳴りました。

こうなると、なおさらすててはおけません。二人は翌晩も八はちま

幡んさま様の森へ出かけました。そして椋の木を見上げると、またたくさんの椋鳥がとまっています。小首を傾かしげて二人の方を見下ろしながら、羽ばたきまでしています。二人は半なかばやけになつて、

その椋鳥を撃ち始めました。ところがこんどは、どうしても弾丸たまが当たりません。椋鳥むくどりはぴよいと身を交わして、弾丸をみんな外そらしてしまいます。二人は何十発となく弾うちましたが、一羽も弾ち落とすことが出来ませんでした。しまいには力がぬけて、鉄砲を杖つえに佇たたずみました。そしてよくよく見ると、今まで椋鳥がとまってると思つた枝には、散り残つたわずかな椋の葉が、明るい月の光りを受けて、嘲あざけり顔にきらきら光っていました。

二人はまた化ばかされたのでした。こんなふうではいつまでも狸たぬきに打ち勝つことは出来ません。もう御隠居ごいんきよに相談する外はないと、二人は考えました。

三

御隠居というのは、村一番の学者で、何でも知ってる老人でしたが、皆が大変尊敬して、「御隠居、御隠居」と呼んでるのでした。次郎七と五郎八とは、翌日早くその家へ行きました。そして前からのことをすつかり話した後、何とかその狸をやつつける工夫くふうはあるまいかとたずねました。

御隠居は二人の話をにこにこして聞いていましたが、やがてこう言いました。

「それは中々おもしろい狸だな」

「おもしろい所じゃございません」と二人は言いました。「しや

くに障さわつてたまらないんです」

「じゃあ一つ、わしがそれを生捕いけどつてあげよう。そのかわり、ほんとに生捕いけどることが出来たら、手荒なことをしないで、万事ばんじわしに任まかしてくれるかね」

二人は承知しました。

その晩月が出るのを待つて、三人は八幡はちまんさま様へ出かけました。

次郎七と五郎八とは繩なわを持ち、老人は南なんてん天てんの木の枝つえを杖つえについでいました。

椋むくの木の所へ行つて見上げると、椋鳥むくどりも何にもとまっていな
いで、ただわずかな葉が淋しそうについているきりでした。

「畜ちくしやう生しやう、今晚は出ないのかな」

「まあ待っていなさい、今におもしろいことになるから」と老人は言いました。

やがて老人は、じつと棕の木を見上げながら、大きな声で言いました。

「それ、木の葉が小鳥になった！」

するとその言葉通りに、棕の葉が皆棕鳥になってしまいました。老人は暫くしてまた言いました。

「それ、狸が姿を現わした！」

するとその通りに、棕の枝に上ってる狸の姿が見えてきました。

老人はまた言いました。

「それ、狸が腹鼓はらづつみをうちだした！」

狸は月に向かつて腹鼓をうちだしました。

次郎七と五郎八とは、今度は御隠居ごいんきよに化ばかされてるような氣持ちになつて、腹鼓をうつてる狸とにこにこ笑つてる老人とをかわるがわる見比べていました。老人はその二人の耳に、こんなことをささやきました。

「狸たぬきは何でも人の言う通りになると聞いていたが、なるほど本当だな。お前さん達は、あべこべに向こうの言う通りになるから化ばかされるのだ。まあ見ていなさい。今に狸が死んだふりをして落ちてくるから、そうしたら、縄なわで縛り上げるがよい」

しばらくして老人は、南なんてん天てんの杖つえをふり上げて、非常に大きな声で叫びました。

「それ、狸が死んで落っこつた！」

すると、今まで腹はらづつみ鼓つづみをうっていた狸は、にわかねに死んだ真ま似ねをして、棕の木から落ちてきました。

次郎七と五郎八とはすぐに駆け寄って、縄で縛り上げてしまいました。

狸は老人の前に引き据すえられて、頭をびよこびよこ下げました。老人は言いました。

「お前は人間を化かして不都合ふつごうな奴やつだ。だが今度だけは助けてやってもいい。まあ、何でこの二人を化かしたか、その理由わけを言つてごらん。そのままでは人間の言葉が喋しゃべれないだろうから、人間に化けて言うがいい」

老人は狸の縄を解といてやりました。狸は一つお辞儀じぎをして、とんぼ返りをしたかと思うと、立派なお婆ばあさんの姿になつてしまいました。そして申しました。

「どうも悪うございました。けれども、もとはこの人達の方がいけないのです。私が月にうかれて腹鼓をうつてると、いきなり鉄砲でうとうとしましたから、つい化かす気になりました。でもあまりしつこく化かしたのはすみません。どうか助けて下さいませ」

「お前がそう言うなら、この二人と仲直りをさしてやってもいいけれども、それには何か手柄てがらをしなければいけない。三日の間猶ゆ予よをしてやるから、そのうちによいことをして私の家へ来なさい。そしたら、この二人と仲直りをさしてあげよう。もし約束を違え

たら、村中の者で狸狩りたぬきをするから、よく覚えていなさい」

狸のお婆さんばあは、大変有難ありがたがつて厚く御礼を言いながら、三日のうちによいことをして来ると約束して、森の中にはいつてしまいました。

老人は、まだ夢のような心地こころちでいる次郎七と五郎八とを促うながして、村へ帰つてゆきました。

四

その翌日から、不思議なことが八幡様はちまんさまに起こりました。今まで荒れ果てていたお宮の中が、綺麗きれいに掃除そうじされました。屋根は繕つくろ

われ、柱や板敷いたじきは水で拭ふかれ、色々の道具は磨みがき上げられまし
た。お宮のまわりの森も、草が抜かれ枯かれ枝えだが折られ、立派な径みち
まで出来て、公園のようになりました。朝と晩には、神しん殿でんの前まへ
にお燈とうみよう明あがあげられました。しかも、誰がそれをしたのか更さら
にわかりませんでした。村の人達は非常に不思議がりました。た
だ村の御隠居ごいんきよばかりが、にこにこ笑いながら、その話を聞いて
いました。

三日目の夕方、一人の立派なお婆さんが、御隠居の家を訪ねて
きました。御隠居はそのお婆さんを座敷ざしきへ通して、大変喜びなが
ら言いました。

「あなたは狸さんですね。約束を守ってほんといいことをして

下さいました。村のお宮が綺麗なものは何よりも気持ちのいいものです。これから長く、村の人達と親したしくして下さい」

老人はすぐに、村中の者を集めました。そして狸のお婆さんを皆に紹介して、一部始しじゆう終の話を話し、八幡様を綺麗きれいにしたのもこの人だと言つてきかせました。村の人達は、始めはびつくりし、次には大喜びをして、やがてうちとけてしまいました。

それからは、八幡様が村人の遊び場所となり、昼間皆がたんぼに出ますと、その間狸たぬきが子供達を守りもてくれました。もし狸に仇あだするような獣けものが来ますと、次郎七と五郎八とが鉄砲で打ち取りました。

毎年一回、秋の月のいい晩に、村中の人々が八幡様に集まりまし

て、酒宴さかもりを開きました。それを「狸のお祭」と言いました。男も女も子供も、大勢おおぜいの子狸や孫狸と一緒に踊り騒ぎました。御ご隠居いんきよがいろんな唄を歌いますと、それに合わせて大きな狸が、腹はら鼓づつみのちようしを合わせました。

ポンポコ、ポンポコ、ポコポコポン、
ポンポコ、ポンポコ、ポコポコポン。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狸のお祭り

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>